

本尊天筆如来出現併不焼寺古跡略録起書抜

佐太本山記録写

抑当山安置之本尊石清水八幡宮御本身の如来出現の濫傷は人皇五十六代清和天皇の御宇男山の開山行教上人貞観元年夏九旬の方施をささげ心中に八幡宮の御本身を拝し奉らん事を祈念するに同年七月十五日の夜八幡宮まのあたり御本身を現じさせ給ひ行教の袈裟の上に弥陀観音勢至の三尊と移らせ給ふ全く是れ彩筆を以て系がきける尊像にあらず天質自然の筆なれば世に是を天筆如来と稱し奉る 行教此由を 帝に奏し申されければ御感浅からずして男山に御社を造営ありて則ち勅使を立てられ此の本尊を宝殿の内に納奉りて 八幡大菩薩の御本身と崇め奉られける 數百年を経て人皇九十七代 光明院の御宇八幡宮山の別当善法寺に神勅ましまして我れ先に本身を出現せし事は偏に利物結縁のためなりといへども時未だいたらざれば五百年來 勅封にして宝殿にあり今正に時を得たり早く 勅封を開き念仏門の本尊として諸人に結縁せしめよとの御告度々に及びしゆへ別當此由を一山にひろめ奏聞をとげ当寺に伝來し奏でる 八幡宮御本身の尊像なり本堂には放光殿と 勅号を賜ひ住持には紫衣の永 宣旨を賜ふて代々 参内昇殿せしめ給ふて 天顔を拜禮し住職の儀 勅命を賜ひ一個の 勅願所一宗の本山となりぬ

さて茲にやけぬの古跡と申すは当山と深き因縁あり当山本尊 天筆男山の宝殿を出し奉り初に摂津国深江の法明上人へ渡らせ給ふ時に貞三丁亥年法明上人終焉の近きを知り給ふて当山の開山誠阿闍上人へ遺言し給ふには我往生の後此本尊併宝物を護持し奉り末代々念仏弘通すべしと附囑し給ふ依て誠阿上人より外にあらずとて猶河内国大庭の莊は上人生縁の地なれば早くかしこに至りて一寺を建立し念仏弘通すべしと附囑し給ふ依て誠阿上人本尊併宝物を獲持して歸り給ふに法明の遺弟等はなほだそねみて本尊を奪ひ取らんと上人を追う事しきりなりければ何方に身を寄せかくれなんと思ひわづらふに堅く戸を閉じたりければ上人誓ていわく此本尊くれんとし給ふに堅く戸を閉じたりければ上人誓ていわく此本尊我に因縁ましまさば戸を開き我をかくし給へと誓けるに戸おのづから開き入り給ひければ戸もとの如く閉まりけり遺弟等此堂にかくることを知といへども入るべきやうなければ火を放てやかとんとするに火たちまちに滅してやけず又堂内に貴き御声ありてなんじ等知らずや此上人は西方極樂世界の脇土觀世音菩薩なり念仏を弘めんためにかりに世に出て給ふもし悪心をもつて儲をむすばん輩は永劫惡趣に随ひて出離の期なからんと某時本尊の御身より光明を放ち給へば彼等たちまち回心して上人に帰依しとも大庭の莊に來りて給仕せりしかしてより此堂を不焼寺と名付て当山の末寺なり

又不焼寺を村の名として開山誠阿上人の墳越なりさて某節來迎の本尊を護持しければ此村の東北に來迎といふ処今にあり其後三年を経て此処に兵五といふもの此五カ村を領しけるものにて異性あるものなるが常に殺生をこのみ人の難儀をいとほざる大惡無道のものなるがあるとき神社仏閣は地所を費やすのみにて益なきものとしてことごとく破却しける冥罰にや二百日をすぎず内に一族十九人残らず疫病にくるしむもの七分までも死したりければ家名断絶す然るに此一族の靈魂疫病となり我家断絶せば此の所も滅せしめんと崇をなし里人疫病に苦しむもの七分までも死したりければ五カ村の男女此由を誠阿上人に嘆きければ上人のいはく我先に急難を免るる処なれば今又なんじ等が病難を救べしとて不焼寺の地に至り給へ兵五死霊得脱のために七晝夜の間施餓鬼を修し給ふ靈魂は得脱し病人はことごとく平愈しける此時開山誠阿上人の計ひを以て本身 如来は我山に詣で拜すべし此地には垂跡を安置すべしとて方三尺の社を造り 八幡宮を安置し給ふて永く此所の鎮守とあがめさせ給ふ開山上人の修徳によつてあやふき子孫を相続しければ当山旧跡數多ありといへども相互に因縁深き古跡と申すは此処なり

右御縁起併記録之内不焼寺之由来のみ書抜候也

当山御縁起者

南都東大寺別當兼華嚴宗長吏前大僧上道如之御筆

同 御前題者

前天台座主妙法院宮一品梵延法親王之御筆

同 御箱者

時宝永三丙戌年当山茲海上人之代江戸表より御召ありて 常憲院

様 本尊の由来縁起 御上覽あらせられみきりも

第一の古跡不焼寺の因縁 上聞にも達し御寄附候

宮入り木遣り音頭

イーヨーホイ 今日ヤ 誰方も(ヨーイヨイ)

御苦勞でエ 御座る(アヨイセ・トオコセ)

御苦勞なア ついでにエエアソレワヨ (ヨ) 後續む

(ワ) ライヤットコセイヨイヤナ・アレワイセ コレワイセソラヨイテイトセ)

奈良の春日の神使の鹿の

鹿のなア 白い毛がエエアソレワヨ 筆となる

めでためでたの わかまつさまよ

目出た目出たの 若松様よ

えだもしげ

枝も繁れば エエアソレワヨ 葉も繁る

ココの座敷は 目出たい 座敷

鶴となア 亀とが エエアソレワヨ 舞を舞う

さしたかづま なかみてのみやれ

差した盃 中見て飲みやれ

中はなア 鶴亀 エエアソレワヨ 五葉の松

■八幡大神宮「宮入り木遣り音頭」

あの戦後いくばくも経っていない頃の 遠い日の思い出である

千林駅のすぐ脇のガードより少し北寄りに京阪電車のガードがもう一つあった。通称：野崎ガードである。これをくぐると何故か急に、異境の地に入ったように思った。

当時、今の内環状線を渡ったところに戦後すぐに新所帯をもっていた姉の所へ乏しい生活を助ける為、母に頼まれてこれも又わずかな生活の糧を運ぶのである。

ガードをくぐり細い道(当時は道幅はせまかった)を少し行くと左手道筋に用水路が流れて居り、各家の入り口に小さい橋が架かっていた。心細く歩いていくと、正面にこの地に古くから祭られている八幡大神宮があった。石清水八幡宮の分霊を奉斎し「不焼宮(やけずのみや)」ときかされていた。それでも子供心に素通りすることなく毎回拍手を打って拜んだ。先日懐旧にかられこの道を歩いた。勿論もうあの川はない。しかしここに川が流れていたという名残か、白線がずーっと続いていた。そしておぼろげな記憶の中にあるお店が60年以上の年月を経て、何軒か残っていた。お茶の梅田三春園、辻本板ガラス屋さん、清滝温泉、大きなお屋敷の上野さん、北清水町、上辻町という名も昭和46年の町名変更で清水2丁目、3丁目と変わっていた。

しかし北清水公民館、又清水北公園にはかつてのその旧町名の由来、変遷を記した石碑があった。〈竹中〉



■現在の野崎ガードと推測される場所
(平成20年10月撮影)